慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴンクール=ロダン未公開往復書簡集 (2) ロダンからの手紙
Sub Title	Correspondance Goncourt-Rodin (2) lettres que Rodin adressa à Goncourt
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.54 (2022.) ,p.97- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20221231-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

ゴンクール＝ロダン未公開往復書簡集（2）ロダンからの手紙

山本　武男

はじめに

本論の前編は「ゴンクール＝ロダン未公開往復書簡集（1）ゴンクールからの手紙」（『日吉紀要／言語・文化・コミュニケーション』第五十一号（2019 年，71 ～ 81 頁）であり，本論がその続編にして完結編である。「ゴンクール＝ロダン未公開往復書簡（1）[1)]」中の「ゴンクールからの手紙」と本論の「ロダンからの手紙」との対応関係の詳細は主に脚注に記述する。「ロダンからゴンクールへの手紙」には 2 通，既に活字化され紹介されたものが含まれる。何れもエドモン・ド・ゴンクールの未完の日本美術研究叢書『十八世紀日本美術』に関するもので，エドモン生前に刊行された，その最初の二巻，即ち『青楼の画家歌麿』と『北斎』に関するものである。1 通目の『青楼の画家歌麿』に関するロダンの手紙はジョヴァンニ・ペテルノッリ氏によって日本で，フランス語原文で紹介され[2)]，2 通目の『北斎』に関するロダンの手紙は，本論文の著者がそのパリ第 4 大学に於ける博士論文にてフランス語原文を紹介した[3)]。その他は初の活字化となる書簡類であり，訳出はごく一部[4)]を除き，ゴンクール，ロダン双方の書簡

1）　該当論文執筆時には，本論文筆者は見落としていたが，「ゴンクールからの手紙」の原文のうち，3 つが既に活字化されていた。まず 2 つを以下に記す。1976 年 6 月 23 日―10 月 18 日にパリのロダン美術館で開催された展覧会のカタログに於いてである。Claudie Judrin, *Rodin et les écrivains de son temps, Sculptures, dessins, lettres et livres du fonds Rodin*, Paris, Musée Rodin, 1976, p. 75, n° 91, n° 92.　カタログの 91 番は，本論文筆者の上記該当論文の p. 84 の 1. の書簡，92 番は同該当論文 p. 82 の 6. の『ゴンクールの日記』第 7 巻の献辞である。残りの 1 つは，少し後の註に記す。

2）　Giovanni Peternolli, « *Outamaro* d'Edmond de Goncourt »，『ジャポネズリー研究学会会報』，n° 6，1986 年，p. 29。

3）　Takeo Yamamoto, « L'Art japonais du XVIIIe siècle », *d'Edmond de Goncourt. Genèse d'un projet interrompu (1888–1896)*, 2007, Université Paris IV, p. 158.

4）　本論文の前半に当たる「ゴンクール＝ロダン往復書簡集（1）ゴンクールからの手紙」中に，原文と和訳が既出のものが 1 つあったので以下に記す。それは，ゴンクールがロダンに，著書『北斎』を贈呈した際に記した献辞で，論文中では，p. 74 に和訳，p. 83–84 に原文を示した。「ロダンと日本」展のカタログに和訳，その別冊のフランス語の付録に原文が出ていた。詳細は以下である。静岡県立美術館（2001 年 4 月 28 日―6 月 10 日），愛知県美術館（2001 年 6 月 22 日―8 月 19 日），『ロダンと

とも本邦初となる。

ロダンのゴンクールへの手紙の特徴は，一言で言えば，ゴンクールという十八歳年上の文豪に対する，ロダンからの溢れ出る敬意である。また，遠慮気味にも，二人の親しい交友関係から滲み出る慕わしさに基づき，「友情」という単語も散見される。ロダンが手紙を宛てたゴンクールは，専ら兄のエドモンである。弟のジュールは 1870 年に亡くなっているからである。本稿の「ロダンからの手紙」は，何れもパリのフランス国立図書館に保管されている[5]もので，パリのロダン美術館所蔵の，前編発表の「ゴンクールからの手紙」と対を成す。「ロダンからの手紙」は，1886 年 2 月付の手紙から始まり，1896 年 6 月 27 日の日付の手紙で終わっている。エドモン・ド・ゴンクールの逝去は 1896 年 7 月 16 日であり，その最晩年までゴンクールとロダンの友情が，十年以上に渡って親密に続いていたことが分かる。その最後の手紙の末尾に，初めて，ロダンはゴンクールに，「わが友よ」と呼び掛けた。これまで遠慮して言えなかった言葉が，思いから溢れ出たかの様である。それから一月もしないうちに，エドモンは突然体調を崩して逝去する。ロダンは何かを感じていたのだろうか。

では「ロダンからの手紙」の内容面での大きな流れを見てみよう。まず 1886 年 2 月の日付のある最初の 2 通の手紙では，前年の 1885 年に亡くなったヴィクトル・ユーゴーの版画をロダンが制作し，それをゴンクールに贈り，一方ゴンクールはその礼に，自身の著書『ガヴァルニ』と思われる書物を贈ったことが分かる。ポール・ガヴァルニは版画家であり，ロダンの版画のお礼に，ガヴァルニのモノグラフィーを贈るのは，自身の著書のうち最適であるとエドモンは判断したのだろう。3 通目では，オーギュスト・シシェルが蒐集した彫刻家バリーの作品の売り立てのカタログの序文をエドモンが書いており，そのカタログを贈られた事にロダンは深い謝意を示している。4 通目，5 通目はロダンがゴンクールに石膏像をプレゼントし，その返事にゴンクールがお礼と賛辞を送付したらしい様子が伝わって来る。6 通目では，エドモンが贈った招待券で，ゴンクール兄弟の長編小説を基にしてアンリ・セアールが脚色した戯曲『ルネ・モプラン』をロダンが堪能したことが記される。「ゴンクールからの手紙」で，上記戯曲の招待状をロダンに送付した旨が記されているので，それと呼応する。7 通目では，エドモ

日本―Rodin et le Japon』，現代彫刻センター，2001 年，p. 97，註（1）。「エドモン・ド・ゴンクール（1822-1896），1896。ペンによる，ゴンクールの手書きの送り状。「ロダンへ。深い友情を込めて」。パリ，ロダン美術館資料室。」以上はクローディー・ジュドラン著「ロダン，浮世絵蒐集家」（小林久見子訳）（p. 95-97）の註である。*Rodin et le Japon, Supplément en français*, Contemporary Sculpture Center, 2002, p. 38, Note (1) : « Edmond de Goncourt (1822-1896), 1896. Envoi à la plume, de la main de Goncourt : “A Rodin / bien amicalement”. Archives, musée Rodin, Paris. »　以上は上記論説の原文，Claudie Judrin, « Rodin, collectionneur d’ukiyo-e »（p. 37-38）の註である。和訳，原文共に，献辞の最後にあるエドモン・ド・ゴンクールの署名は省かれている。

5）各書簡の請求番号に関しては，本論文終部の「ロダンからゴンクールへの手紙の原文」の脚注を参照されたし。

ンから『ゴンクールの日記』を贈られたロダンの謝意と賛辞が述べられる。8 通目では，何かの事情でゴンクールの文藝サロン「グルニエ（屋根裏部屋の意）」に参加できなかったが，日曜日の会には出られる旨が語られる。9 通目では，1888 年末に上演されたゴンクール兄弟作の同名の長編小説に基づくエドモンの戯曲『ジェルミニー・ラセルトゥ』のロダンの観劇評が語られる。「ゴンクールからの手紙」で，上記戯曲の招待状をロダンに送付した旨が記されているので，それと呼応する。次の 10 通目は，ゴンクールのオートゥイユの家で催されていた文藝サロン「グルニエ」への，エドモンからの招待にロダンが答える旨の手紙である。矢張り数通，「グルニエ」の招待状関連の書簡類が「ゴンクールからの手紙」にあるので，そのどれかと呼応している可能性がある。

11 通目では，『ゴンクールの日記』を作者から受け取った感激と感謝が述べられる。パリのロダン美術館にはゴンクールからロダンに贈られた『日記』が作者の献辞付きで第 4 巻を除く第 1 巻から第 9 巻までが保管されている。ところがこのロダンの手紙の明記されている日付からは，出版年月日が近い，欠損している第 4 巻に対応する可能性が高い。12 通目も，ロダンがゴンクールの著書を受け取った感謝の言葉が述べられるが，その書籍は『ゴンクールの日記』で第 5 巻と考えられる。13 通目は『青楼の画家歌麿』をロダンが受け取った際のものである。本著作は世界初の歌麿論であり，また世界で最初の浮世絵師の本格的なモノグラフィーである。文豪の手によってこの様な文学性のある美術書が書かれたことに，ロダンが感動しているのがその手紙から伝わって来る。14 通目は，ロダンが体調を崩し，「グルニエ」への参加が叶わないことを悔やんでいる。15 通目，16 通目，17 通目は，ゴンクールが蔵書に芸術家の絵や版画を加えて，自分の書架を飾る為の豪華本を作って楽しんでいたことに関するもので，オクターヴ・ミルボーの小説にロダンの手になるミルボー像を加えようとする計画をロダンが承諾，制作した際のものである。この件は，「ゴンクールからの手紙」や，ゴンクールの『日記』に於いても触れられており，ゴンクールとロダンの交流の中でも，重要な出来事であったと看做される。

18 通目もその件に関するものと考えられる。19 通目には，政治家ポワンカレと芸術家らとの会合に，ロダンがゴンクールを誘っている。20 通目は，ゴンクール兄弟の共著にして，1855 年から 1856 年に掛けてのイタリア旅行の記録である『過ぎし日のイタリア』（1894 年刊）をエドモンから贈られたことへの感謝が述べられる。21 通目，22 通目に関しては，ゴンクールの第 7 巻と思われる『日記』を作者から贈られたことに礼を述べつつ，21 通目では，ロダン自身が良く描かれていることに感激している。22 通目では，『日記』の率直な筆遣いが，ゴンクールの「移ろい易い人間性をその瞬間の真実の中でを表現しようとする[6)]」，『日記』の序

6） Edmond et Jules de Goncourt, *Journal, Mémoires de la vie littéraire*, éd. Robert Ricatte, 1989, Robert Laffont, coll. Bouquins, t. I, p. 19 参照。

文に触れられている，『日記』執筆の目的に合致していることを確認していると考えられる記述がある。23 通目では，作者から『北斎』を贈られたことを通し，如何にゴンクールが西洋絵画に，日本美術紹介を通して影響を与えて来たかを力説している。24 通目では，ゴンクールからその『日記』を贈られた旨が記されている。手紙の日付から『日記』の最終巻である第 9 巻であると考えられる。この手紙では，ロダンは，自分の世代の藝術家たちにとって唯一無二の尊敬できる人として，ゴンクールを規定している。

さて，以下では，ゴンクールの『日記』中の，ロダン関連個所に触れる。具体的な『日記』と「ゴンクール＝ロダン往復書簡」との関連は，「ロダンからの手紙」の翻訳の脚注を通して行う。『日記』では，ロダンは 1886 年 4 月 17 日（土）に初登場する。ここで，ロダンは全『日記』中，最も詳細に描写されている。パリのロダン美術館に保管されている「ゴンクールからの手紙」の 1886 年 2 月 9 日付の書簡に，ロダンの『地獄の門』を見に行きたい旨記しており [7]，上記の『日記』の描写は，それの実現した日の記述である。1887 年 1 月 5 日（水）の記述には，ブラクモンと共にロダンがゴンクールの家を訪れ，そのコレクション中の日本の枕絵を見て，ロダンが興奮する様が興味深く描かれている。1887 年 12 月 29 日（木）には，ロダンの創作を中心にした日頃の時間割りに就いての貴重な記録がある。1888 年 2 月 17 日（金）には，ゴンクール主催で，ロダンの人柄と才能を称えて食事会を開いた旨が記されており，二人の親密さを示すエピソードとして見逃せない。1888 年 2 月 26 日（日）の記述には，ロダンが彫刻の制作に於いて，最後に細部を付けて行く段階で，当初の動きが減ぜられることを如何に抑えるかに苦心している事を吐露する描写があり，巨匠ロダンの創作上の秘密が語られていて興味深い。1888 年 6 月 14 日（木）では，ロダンが不図，家からいなくなり，数日して帰って来て，どこへ行っていたか尋ねる人に，大聖堂を幾つか見て来た，と答えるエピソードが語られる。ロダンの自由な人となりが窺える逸話と言えよう。1888 年 10 月 28 日（日）には，ゴンクールが見せた浮世絵の刺激が強いとして，ロダンが軈て目を外らしたという，貴重なエピソードが語られる。ロダンは，浮世絵には感じ易かった様である。1889 年 4 月 18 日（木）には，ロダンのダンテ崇拝が，やや行き過ぎたものとして語られる。ロダンとカルポーを比較し，カルポーを近代的な彫刻家とし，ロダンの，美学の範を過去の文学に求める傾向を強調し

7） 山本武男,「ゴンクール＝ロダン未公開往復書簡集（1） ゴンクールからの手紙」,『日吉紀要／言語・文化・コミュニケーション』，2019 年，N^{O} 51，p. 77（翻訳），85（原文）参照。そこに 1886 年 2 月 9 日付のゴンクールがロダンに宛てた手紙が掲載され，ブラクモンが大絶賛して語ってくれた『地獄の門』をゴンクールも見に行きたい旨が記されている。著者は本論文p. 75 の解説にて，この手紙の 1886 年の日付を 1896 年と誤認し，エドモンの死の直前の出来事との認識を示し，解釈してしまったが，当然誤りである，ここに訂正しお詫びする。他方，上記論文p. 78（翻訳），86（原文）には，エドモンがロダンに送付した名刺にドーデーがロダンの『地獄の門』を賛美していることが記されている。当時既に『地獄の門』はロダン周辺の文化人たちの間で極めて高い評価がなされていたことが分かる。

ている。1889年6月23日（日）では，ロダンとモネの共同の展覧会に触れ，ロダンが，実は，モネはじめ，他の芸術家のすることには興味は薄く，自分の藝術だけに関心があるのだと展覧会で発言したという，人伝（ひとづて）に聞いたエピソードを紹介している。1889年7月3日（水）には，オクターヴ・ミルボーが感激を以てロダンの彫刻や人柄に就いて語る様が描かれている。1889年7月11日（木）には，ロダンとモネの共同展覧会に就いて触れ，ロダンを才人としつつも，印象派画家たちの中にあって，最初に，粗造り（エスキス）の状態を完成と看做した最初の彫刻家と規定している。ゴンクールは印象派以前の克明に描き込む手法に，自身の審美眼は向いているとも告白している。1890年1月30日（木）では，ジェフロワがロダンとモネを熱烈に崇拝し，他の藝術家は眼中にない様が記される。1890年5月14日（水）には，ロダンが恋人たちが絡み合う姿を表現する独創的にして高度な大才を持った彫刻家であると湛えている。1890年7月10日（木）には，正面から向かい合って見ると，ロダンの頭頂部の形が扁平で，ローマのトラヤヌス帝の記念柱のレリーフにある異民族のそれを思い出させるとしている。1890年7月31日（木）には，ロダンのヴィクトル・ユーゴー像制作に関するものと解釈されている短文がある[8)]。1891年7月23日（木）には，ロダンがジャワの踊りや日本舞踊とフランスのダンスを比較し，後者は目立って飛び跳ね，不連続性があるのに対し，前者は連続的な動きの中の蛇行や波打つ様な様子があるとしている。また同日，ロダンに対し，ゴンクールは西洋の美意識は色より線により感じ易く，エトルリアの壺などはその例だが，一方，中国，日本の磁器では，何より色彩がその美を形作っていると語ったとしている。1893年4月16日（日）には，ロダンが，今年は仕事にやる気が出ない，とぼやいている様が描写されている。1893年6月18日（日）には，ブラクモンとロダンの求めに応じ，文部大臣ポワンカレ宛てに，ギュスターヴ・ジェフロワにレジオン・ドヌール勲章を授与してほしい旨，手紙を認めたとし，その推薦状の全文が掲載されている。1893年7月8日（土）には，ロダンがゴンクールに，上記の推薦状が非常に良い効果を持ちえたと伝えた事が書かれている。1894年3月8日（木）には，ゴンクールがアルフォンス・ドーデー夫妻の家で，ロダンの弟子のカミーユ・クロ―デルに会い，日本の大きな花が刺繍であしらわれたカンズーを着て，独特の田舎風の口調で話す様子や綺麗な目をした子供らしい顔付きなどを描写している。1894年5月10日（木）には，美術批評家ロジェ・マルクスが見た，ロダンとカミーユ・クローデルの同棲生活と別れ，縒りを戻した後の決定的な別れ，その際のロダンの取り乱した姿等が記述されている。1894年6月10日（金）には，画家ジャン＝ルイ・フォランが，ロダンら，最上等の才人たちの励ましによって奮起したという本人の言葉が引用されている。1894年6月11日（月）には，ゴンクールが，その率直な筆遣いの『日記』に敵意を抱く何者かからの悪意のある手紙を受け取ったとして，それを筆写しているが，その者の手紙に「グルニエ」の客として列挙される人達の中にロダンの名前が見ら

8） Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. III, p. 456, n. 3 参照。

れる。1894 年 6 月 22 日（金）には，時の文部大臣ジョルジュ・レーグに先のジェフロワのレジオン・ドヌール勲章推薦の件を問い合わせたところ，実に沢山の候補者がいるとのことで，なかなか難しい感触が記されている。1894 年 7 月 4 日（水）には，ゴンクールがブラクモンと，ロダンとカルポーの比較をした旨が記されており，ゴンクールがカルポーをより完成された芸術家であるとするのに対し，ブラクモンはロダンの方がより独創的であるとし，構成が完璧ではないが，ロダンは，構成は自然が自ずと成してくれる，自分から為す必要はない，という考えでやっていることをゴンクールに念を押して伝えている。1894 年 11 月 2 日（金）には，建築家にして作家フランツ・ジュルダンが，その息子の画家フランシスが穏やかなポーズから一転，ミケランジェロやロダンの様な捩じったポーズをモデルに要求する様になったと語ったと記されている。1894 年 11 月 25 日（日）には，ロダンのバルザック像が注文主との間で当初の予定とは異なり，一筋縄ではいかなかったことと関連した記述が見られる[9]。1894 年 12 月 14 日（金）には，ゴンクールが自邸のコレクションを描写する中に，ゴンクールの求めに応じてロダンが装飾したオクターヴ・ミルボーの小説も登場している。1894 年 12 月 29 日（土）には，ミルボーが語る，ロダンがミルボーの胸像を作った際の模様が記されれている。1895 年 1 月 9 日（水）には，ロダンがピュヴィス・ド・シャヴァンヌの為に祝宴を催した旨が記されている。1895 年 7 月 6 日（土）には，鉄道の中で，憔悴した様子でロダンがゴンクールに，芸術関連の委員会が，仕事を助ける筈が，逆に仕事の時間を奪っていると嘆く様が描かれている。1896 年 2 月 4 日（火）には，ミルボーが，ロダンがここ何年かの心身の不調から脱し，仕事に復帰し，とても素晴らしい仕事をしているとゴンクールに話したことが記されている。1896 年 4 月 15 日（水）には，カリエールが出来た許りのリトグラフのゴンクールの肖像を持って来た旨が記され，それが，ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ，ロダン，ロシュフォール，ヴェルレーヌの肖像と併せて，ルメルシエ社から第 1 回配本予定の現代の肖像シリーズの 1 枚である事が語られる。

総じて，『日記』の中のロダンは，始めはゴンクールからは可成り年下ながら，巨匠ロダンとして，その姿は，距離を置き，敬意を以て描かれるが，段々交際が密になって行くにつれ，ロダンの人間臭いエピソードが次々と現れ，興趣が尽きない。見た儘，聞いた儘，感じた儘を記して，必ずしも読み返さないゴンクールの『日記』の方針[10]が，親交厚かったロダンに対しても遺憾なく発揮されているのだ。また時折，日本美術が二人の話題に上るのも，日本美術を愛した二人ならではであると感じられるとともに，ジャポニスム蘭（たけなわ）のパリの同時代の様子が手に取る様に伝わって来ることも見逃せない。ゴンクールとロダンの未完書簡を活字に起こし，日本語に翻訳し，またゴンクールの『日記』とそれらの書簡を比較検討すると，世界の美学に

9） Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. III, p. 1035, n. 1 参照。

10） Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. I, p. 19–20 参照。

変革を齎(もたら)したフランスの文豪とフランスの大彫刻家が，その十年を超える交友の中で，敬意と温かみを以て，如何に親密な友情を育んで行ったかが理解される。

ロダンからゴンクールへの手紙

1.

1886 年 2 月 [11)]

有り難う御座います，先生

ベルナールが手紙で，彼はユーゴー[12)] 氏のドライポイントの版画一枚が欲しいと私に言って来ましたが，先生もまたそれを一枚，ご所望だと書いてありました。

先生のお役に立てる事を私は大変嬉しく存じます故，この小さな品を，先生への私の賛美のささやかな証としてお受け取り頂けましたら幸いです。

A・ロダン

ヴォジラール大通り 117 番地

2.

1886 年 2 月

親愛なる先生

先生が私に仰ってくださった事，そして先生の御著書[13)] をお送り頂いた事を，大変誇りに思います。

ご本は私の書斎の名誉となります。

先生をお迎えし，先生に私の仕事ぶりをお見せ出来る時を，首を長くしてお待ち致します。

11） 山本武男，前掲論文，p. 77 参照。ゴンクールはロダンへの 1886 年 2 月 9 日付の書簡に於いて，ロダンから見事なエッチングを贈られた旨，感謝している。ロダンの「ドライポイント」とゴンクールの「エッチング」の認識の違いはあるが，同じロダンの版画を指すものと思われる。

12） ヴィクトル・ユーゴー（1802–1885）。

13） 山本武男，前掲論文，p. 77 参照。ゴンクールがロダンに送った 1886 年 2 月 9 日付の手紙に，ロダンから贈られた版画のお礼に，ある友人を偲んで書いた芸術関係の書籍を送付するとある。これは，現在パリのロダン美術館に所蔵されている，1873 年刊の『ガヴァルニ』であると考えられる。本書はゴンクール兄弟の友人で，挿絵画家，石版画家のポール・ガヴァルニ（1804–66）のモノグラフィーである。

エドモン・ド・ゴンクール先生へ。

敬具

ロダン

3.

（1886 年[14]）

親愛なるド・ゴンクール先生

シシェル[15]・コレクションの売り立てに先立ち，「一言[16]」をお送りくださることで，私のことを気に掛けてくださり，誠に有り難う御座います。

この一言は，バリー[17]のことを，この彫刻家とその価値に気付かない人々に分からせてしまう名文です。

バリーのジャガー像の描写を読めば，彼の素晴らしい力が彷彿として来ます。

巨匠には，巨匠のことが分かるのですね。

ド・ゴンクール先生へ。

敬具

A・ロダン

14） フランス国立図書館では，本書簡は 1887 年の日付のものと推定されているが，シシェルのバリー・コレクション売り立てが 1886 年 2 月 27 日にパリのオテル・ドゥルオで行われているので，本論文の著者は 1886 年の書簡として分類した。

15） オーギュスト・シシェル（1838.3.29–1886.5.13），美術商。生没年，肩書はWikidata（https://m.wikidata.orq）を参照した。

16） 上記バリー・コレクション売り立てのカタログの序文を「一言」（p. 3–7）と云うタイトルでエドモン・ド・ゴンクールが綴っている。競売に先立ち，ゴンクールはロダンにこのカタログを送ったものと推測される。その序文の終部に，バリー作の『兎を貪るジャガー』の描写がある。カタログに就いての更なる詳細に関しては，本論文終部の「ロダンからゴンクールへの手紙の原文」の該当書簡の脚注を参照されたし。

17） アントワーヌ＝ルイ・バリー（1795–1875），動物彫刻家。ゴンクールはその『日記』の 1886 年 4 月 17 日（土）付の箇所で，自身がブラクモンと共にロダンのアトリエを訪ねた旨を記しているが，文中で，ロダンの『カレーの市民』の塑像の人体に見られる見事な窪みと，バリーがその動物像の脇腹に描き出しているそれとの類似性を指摘している。Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. II, p. 1242–1243 参照。

4.

（1886 年[18]）

親愛なる先生

小さな石膏像をお送り致しますが，もしお気に召す様でしたらお受け取り頂けましたら幸いですが，左様でない様でしたら，他のものも差し上げる事が出来ます。

親愛なるド・ゴンクール先生へ。

敬具

A・ロダン

ヴォジラール大通り 117 番地

5.

（1886 年[19]）

わが親愛なる先生

お手紙をお送りくださり有り難う御座います，光栄の至りです。どう考えても，羨む人も出て来ることでしょう。

エドモン・ド・ゴンクール先生へ。

敬具

A・ロダン

6.

（1887 年 4 月[20]）

親愛なる先生

18） フランス国立図書館の推定。

19） フランス国立図書館の推定。

20） フランス国立図書館の推定では，1886 年であるが，本論文の著者は，1887 年 4 月と推測する。理由は以下に続く脚注参照。

私からの祝辞を申し上げ，また『モプラン』の券2枚[21]をお送りくださることでお示しくださった，先生の思い遣りに満ちたご親切に，お礼を申し上げに上がっても宜しいでしょうか。

先生の創造された人物達，先生の情熱，先生の機知（エスプリ）と共にあの夜を過ごすことが出来たのは幸運でした。

親愛なるド・ゴンクール先生へ。

敬具

ロダン

7.

（1887年[22]）

わが親愛なる先生

先ほど，先生の『日記[23]』を読了致しました。

私という彫刻家に，先生の賛美者たちの仲間に入ることを，そしてどれ程，この書物の中に私が，比類ない技術で示された真実を見付けたかを，先生に申し上げることをお許しください。

どれ程，（・・・）なものが（・・・）

（以下欠損）

8.

（日付なし[24]）

21） 山本武男，前掲論文，p. 85を参照すると，ゴンクールがロダンに宛てた名刺に，兄弟の同名の長編小説をアンリ・セアールがアレンジした戯曲『ルネ・モプラン』の券を2枚送付した旨が記されている。Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. I, p. CIV, t. III, p. 31を参照すると，本戯曲は1887年4月15日に初演を迎えたことが分かるので，ロダンもその日以降の公演を観たものと考えられる。また本書簡にはロダンの筆による日付はないが，フランス国立国会図書館は1886年の年号を付しているが，本論文の著者は戯曲の公演の時期から1887年4月と推測する。

22） フランス国立図書館の推定。

23） Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. I, p. CIV, CVI, t. III, p. 19, 72と，フランス国立図書館が本書簡に付した年号を参照すると，エドモンがロダンに贈った『ゴンクールの日記』は，1887年3月3日（木）刊の第1巻か，1887年10月21日（金）刊の第2巻か，或いはその両方かと推測される。両巻共に，パリのロダン美術館には保管されている。

24） 書簡に，フランス国立図書館の推定の記述なし。

わが親愛なる先生

昨日は，希望していたのですが，お礼に上がる事が叶いませんでした。
予定していたこの楽しみは，ですので，日曜日[25]に延期せざるを得ません。

敬具

ロダン

9.

（1888年[26]）

わが親愛なる先生

『ジェルミニー』は傑作です。
喧(かしま)しい風評の意味が分かりません。
先生の恭(うやうや)しく忠実なる賛美者，

ロダンより

10.

（1889年[27]）

親愛なる先生

25） パリのロダン美術館には，日曜日のゴンクール邸での文藝サロン「グルニエ（屋根裏部屋の意）」への名刺に書かれた招待状が多数保管されている。山本武男，前掲論文，p. 78–79参照。他方，ゴンクールの『日記』に拠れば，ゴンクールとロダンは木曜日にも時々会っている（1887年12月29日，1890年7月10日，1890年7月31日，1891年7月23日）。

26） ゴンクールの『日記』の1988年12月の記述に，エドモン・ド・ゴンクール作の戯曲『ジェルミニー・ラセルトゥ』が，オデオン座で，レジャーヌ主演で上演された様子が，屢々語られる。またゴンクールはロダンに本戯曲公演の招待状を送付しているので，それに対応する。山本武男，前掲論文，p. 78（翻訳），85（原文）参照。フランス国立図書館はこの手紙の書かれた時期を1889年と推測して記しているが，本論文著者は上記戯曲上演の時期に照らして1888年と判断する。

27） ゴンクールはロダンに何枚もの「グルニエ」の招待状を送付しているが，日付の無い場合もある。山本武男，前掲論文，p. 78，79（翻訳），86（原文）参照。

日曜日の件ですが，先生が私を，「グルニエ」での知的魅力に富んだお集りにご招待くださるとのご光栄（先生の御招待，状拝受致しました）を有難くお受け致し度く存じます。

変わらぬ御厚情を宜しくお願い致します。

敬具

ロダンより

11.

大学通り 182 番地　　1890 年 10 月 24 日

わが親愛なる先生

先生は，真実を際立たせる天賦の才をお持ちです。私は，先生の御著書に，感銘をお受け致しました。先生が，先生の『日記[28]』を私に御送付くださったことに関し，私が心から光栄に思っておりますことをご承知頂けましたら幸いです，そして敬意と感謝の思いを込めまして。

ロダンより。

近日中の日曜日に。

12.

大学通り 182 番地
1891 年 3 月 19 日

わが親愛なる先生，有難う御座います。

先生の御著書[29] をお送りくださることで，先生の御友人の中の一人に数えて頂けることを光

28） エドモンがロダンに贈った『ゴンクールの日記』は，1890 年 10 月 6 日（月）出版（Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. I, p. CVIII, t. III, p. 479 参照）とされる，第 4 巻と考えられる。

29） エドモンがロダンに贈った著書は，1891 年 2 月出版（Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. I, p. CVIII参照）とされる，『ゴンクールの日記』の第 5 巻（1872-1877）と考えられる。

栄に思います。

感謝と敬意の思いを込めまして。

ロダンより

13.

大学通り 182 番地

（18）91 年 6 月 23 日

わが親愛なる先生

何て幸運なことでしょう，楽しく先生のご著書を読むことが出来ますなんて。私は

まだ腰痛から抜け出すことが出来ずにおります。ですが，頭の方は良好で，『歌麿[30]』を読んで楽しむ準備は出来ております。ああ，わが親愛なる先生，ご立派です。この日本美術研究は，皆にとって満を持して現れた感があります，それは先生が，お与えくださる知識に血を通わせることが出来る方であるからであり，またこの美術の紹介が，これまでの様に日本への旅行家によってではなく，フランス語の偉大な使い手によってなされているからであります！

有難う御座います。　　先生を尊敬してやまぬ忠実なロダンより。

14.

（1891 年[31]）

わが親愛なる先生

目下，風邪を引いておりまして，さもなくば「グルニエ」に，今晩の初日に，是非とも出席したかったですが，二日目[32]にと云う事で，日曜日にお会いしましょう。

30）『日記』の 1891 年 6 月 16 日（火）付の記述に，『歌麿』が出版された旨が記されている。Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. III, p. 597 参照（« Aujourd'hui a paru *Outamaro*. »）。

31）フランス国立図書館の推定。

32）本書簡は，ゴンクールの文藝サロン「グルニエ」が，初日，二日目と，二回に分けて催された機会があったらしい事を伝えている。

先生を尊敬してやまぬ忠実なるロダンより。

15.

大学通り 182 番地
（18）92 年 3 月 5 日

わが親愛なる先生

ご郵送頂きました件，有難う御座います。
先生が私のことを考えていてくださることを，誠に光栄に思いますと同時に，どのようにお礼申し上げるべきか，感謝の言葉も御座いません。

私が肖像画を仕上げるに就き，モデルのミルボー[33] は未だ参りませんが，既に私は版画の仕事に専念出来る準備は出来ております。何れにせよ，夏の間にはお約束をお果たし致します。
先生の忠実なる崇拝者，

ロダンより

16.

わが親愛なる先生

短い休暇の間に版画を作りますので，ミルボーの著書を私の若い弟子にお渡し頂けますでしょうか。
ド・ゴンクール先生，私にとりまして，この肖像に取り組めることは大変光栄です，全力を尽くす所存です。
心から敬愛してやまぬ先生に忠実なロダンより。

（18）92 年 7 月 30 日

33） Octave Mirbeau, *Correspondance avec Auguste Rodin*, éd. Pierre Michel et Jean-François Nivet, Tusson, Du Lérot, éditeur, 1988, p. 113, n. 2 参照。オクターヴ・ミルボーからロダンへの 1892 年 8 月初旬付とされる書簡に，ゴンクールの名前が見られ，その記述はこの件に関するものと編者は註に於いて判断し，Claudie Judrin, *ibid*. p. 75, n° 21 からその書簡の大部分を引用している。

17.

わが親愛なる先生

先生からのご貴簡を拝受致しましたので，近くミルボーの家に参りまして，デッサンでクロッキーを取って参ります。

先生への恭しい親愛の情をお伝え致しますと同時に，ドーデー夫妻に新作の成功をお祝い申し上げています旨，宜しくお伝えくださいませ。

ロダンより

（18）92 年 8 月 6 日

18.

わが親愛なる先生

近日中の日曜日に，先生まで拙作をお持ち致します，少しでもお気に召す様でしたら，自信を取り戻せますし，それ故，先生にも感謝申し上げる所存です。

先生に心から忠実なるロダンより

（18）92 年 11 月 18 日

19.

（1894 年[34]）

わが親愛なる先生

先生はお辛い夜を過ごされたとのことですが，かなり良くおなりになられている旨もまた存

34） フランス国立図書館の推定。

じ上げております。その様な夜のご疲労のあとで先生の貴重なご休息のお邪魔をするのは私の本意では御座いません。

1886年当時の私という彫刻家に先生がご関心をお寄せくださったこと（『日記[35]』の件です）に感謝致したく，またジェフロワに関しましては（装飾の件です）引き続きご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

文部省の美術官房長で我々の友人であるエック[36]が，私たちに，日曜日に行われる，私にとりましては二度目の大臣の会に参加してほしいとの旨，伝えてきておりまして，メンバーは先生と，ブラクモン，カリエール，私です。ポワンカレ閣下との第一回目は，会の間を通して，とても有意義なものでした。

エックは水曜日や金曜日開催の可能性も私に示唆しておりましたが，今週，ほどなく，先生がご快癒され，お越し頂けそうでしたら，私どもは，先生のご都合次第で御座いますので，私までお知らせ頂けましたら幸いです。

先生に向かい，心からの尊崇の念を込めまして。

敬具

ロダン

20.

1894年6月7日

親愛なる先生

先生のご厚意で，弟君たるジュール様との共作のご著書，『過ぎし日のイタリア[37]』を拝受するというご光栄に預かりました。

35）『日記』の1886年4月17日（土）に，エドモンがブラクモンと共にロダンを尋ねた旨が記され，ロダンの容姿やアトリエ等の様子が長く，かつ詳細に記されている。従って，本書簡で言及されている『ゴンクールの日記』は第7巻（1885-1888）（1894年6月23日（土）刊，Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. I, p. CXII, t. III, p. 982参照）と考えられる。

36） ジョルジュ・エック（Georges Hecq, 1852-1903），ロダンの親友，1878年から1895年に掛けて国立高等美術学校事務局長。ロダンは1905年に彼の胸像を制作した。本論文著者は以上の記述を以下を参照して翻訳に近い形で記した。Octave Mirbeau, *ibid.*, p. 134, n. 1.

37） エドモンがロダンに贈った『過ぎし日のイタリア』（1894年刊）は，パリのロダン美術館に保管されている。山本武男，前掲論文，p. 74（翻訳），83（原文）参照。

先生にお示し頂きました厚情に深く感謝致します。親愛なる巨匠に，私の恭しい心よりの友情を込めまして。

ロダンより

21.

（18）94 年 7 月

わが親愛なる先生

先生の回想録の一巻[38] を拝受し，そこには私が好意的に描き込まれているという，かくなる大きな御光栄に預かりました。

先生の名高い簡潔で力強い文体は，先生のルマルク[39] によって，立派で，実物よりも美しい貴族の取り巻き[40] を，描き出しております。

心からの賛意を先生に捧げます。　　ロダンより

22.

（18）95 年 5 月 29 日

親愛なる先生

38）ここで言及されている『ゴンクールの日記』もまた第 7 巻であると考えられる。Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. I, p. CXII に拠れば，本巻は 1894 年 6 月 23 日に発行されており，本書簡の日付に近い。またロダンが好意的に描写されているという記述からも，書簡 19. の註で触れた『日記』の 1886 年 4 月 17 日（土）の可成り長く，詳細なロダン訪問の記述が想起されるからである。従って書簡 19. の段階では，『日記』の第 7 巻にロダンが登場することのみ知らされて，まだ，書籍は受け取っていなかったらしい事が窺われる。

39）ルマルク（remarque）は，版画に関する専門用語である。以下に『小学館ロベール仏和大辞典』電子版の定義を引用する。「腐食の経過をみるために，構図外の余白に彫られた小版画，素描風習作。ルマルク入りのステートは希少価値を持つ。」版画も制作するロダンが，ここで「ルマルク」と云う専門用語をゴンクールの文才を表すメタファーとして用いている辺りに，ロダンが『ゴンクールの日記』中のロダンの描写を大いに気に入っている様子が伝わって来る。

40）「美しい貴族」とは，旧体制下の貴族階級の血を引くエドモン・ド・ゴンクールを指し，その「取り巻き」とはロダン本人を指す。

先生の「ご回想[41]」に就きましては，何時も光栄に存じます。如何ほど先生に，私が心から感謝申し上げているか，お伝え出来ている様でしたら幸いです。先生は，真っ直ぐなお人です。ご自身で決められた目的[42]に向かってまっすぐ進む為に，人間たちとその性格を突っ切って行かれておられます。

先生に忠実なるロダンの賛美と敬意と共に。

23.

大学通り 182 番地

わが親愛なる先生

先生は，私たちと日本との間に，コミュニケーションを確立なさった方です。既に色斑[43]を用い，画家たちのうち，素描に優れた者たちがそれを生かして来ております。彫刻家たちにもその様な動きが生まれることを，私たちは祈っているのですが。ずっと以前から，先生は理知的な方法で日本を発見して来られ，そして今日，巨匠の伝記[44]を以て，私どもへの教育を補完してくださいました。

先生の人間味溢れるご研究に加え，更に先生による，その芸術的天分に突き動かされての日本訪問[45]，彼らの美術の探求が待たれます。先生の明智はそれらの任務を，たゆまぬ仕事への

41） エドモンがロダンに贈った著書は，1895 年 5 月 8 日出版（Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. I, p. CXII参照）とされる，『ゴンクールの日記』の第 8 巻（1889–1891）と考えられる。

42） エドモンは「一言で言えば，移ろい易い人間性を，その「瞬間の真実」に於いて，表現する事を望む（ambitieux, en un mot, de représenter l'ondoyante humanité dans sa *vérité momentanée*）」（Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. I, p. 19）と，1887 年発表の『日記』の序で述べている。ロダンはそのことを言っていると考えられる。

43） 色斑（tache）の定義は，『小学館ロベール仏和大辞典』電子版に拠れば，「印象主義などの絵画に見られる，絵の具の流動的な斑状の広がり」である。

44） エドモン・ド・ゴンクール著『北斎』を指す。『日記』の 2 月 13 日（木）の箇所に，「2 時にシャルパンティエ書店で私の著書『北斎』が出版された。（Départ chez Charpentier à deux heures de mon livre d'*Hokousaï.*）」（Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. III, p. 1235）とある。

45） 『日記』の 1876 年 11 月 17 日（金）付の記述に拠ると，エドモンは『日本での一年』というタイトルの旅日記形式の日本滞在記の執筆を望んだが，当時 54 歳で，年齢的に不安であるとも書いており，最終的には実現しなかった。Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. II, p. 717 参照。この日付の箇所は，ゴンクールがロダンに贈った『ゴンクールの日記』第 5 巻（1872–1877）の中にあり，本書簡でのロ

愛を以て，十分に果たし得るでしょう。親愛なる先生，先生は多くの事に於いて，私たちのお手本であり，そして私は，先生の優しさや，私にお目を掛けてくださいますことに感謝申し上げております。

ご著書をお送り頂きまして，有難う御座いました。

先生の忠実にして親愛なるA・ロダンより。

（18）96年2月

24.

わが親愛なる先生

先生とは，友誼をお示しするのは何時も私の方が後になってしまいます。先生から，ご著書の『日記[46)]』を拝受し，とても光栄です，そして先生が絶えず私と謂う彫刻家にお示しくださるご好意に，然も先生の様な巨匠からのものであるだけに一入（ひとしお），深く心動かされます。私の世代の人間たちは，他の誰に，この様に深く，情愛の籠った，称賛に満ちた敬意を抱いておりますでしょうか。

わが親愛なる先生にして友よ，私の心からの誠をお受け取りください。

オーギュスト・ロダンより。

（18）96年6月27日

ロダンからゴンクールへの手紙の原文

Corespondance Goncourt-Rodin (2)

ダンによるゴンクールの日本訪問への期待は，『日記』の上記記述を踏まえてのものである可能性もある。但し，本書簡を受け取った時点で，エドモンは73歳であるから，実現は愈々難しかったものと考えられる。

46） エドモンがロダンに贈った著書は，1896年5月26日出版（Edmond et Jules de Goncourt, *ibid.*, t. I, p. CXIV参照）とされる，『ゴンクールの日記』の第9巻（1882-1895）と考えられる。

1. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

Février [18] 86[47)]

Merci, Monsieur

Bernard m'a écrit qu'il désirait une épreuve pointe-sèche de Monsieur Hugo et que vous en désiriez une aussi.

J'étais très heureux de pourvoir vous être agréable et je vous prie d'accepter cette petite chose, comme un faible témoignage de mes admirations pour le Maître,

A. Rodin

117 Boulevard de Vaugirard

2. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

Février [18] 86[48)]

Cher Maître

Je suis très fier de ce que vous voulez bien me dire, et de l'envoi de votre livre.

Ce sera l'honneur de ma bibliothèque.

J'attendrai avec impatience le moment de vous recevoir, et de vous montrer mon travail.

Agréez, Monsieur Ed. de Goncourt, l'expression de mes respectueux sentiments.

Rodin

3. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

[1886[49)]]

47) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 235

48) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 236.

49) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 241–242. Dans la Bibliothèque nationale de France, la présente lettre est classée comme celle qui a été probablement écrite en 1887, mais la vente de la collection d'Auguste Sichel eut lieu le 27 février 1886, donc ici, on la classe parmi les lettres datées de 1886.

Cher monsieur de Goncourt

Je vous suis très reconnaissant d'avoir pensé à moi en m'envoyant le *mot* qui précède la vente de la collection Sichel[50] .

Ce mot est un chef d'œuvre qui ferait comprendre Barye à ceux qui ne se doutent pas de ce sculpteur et de sa valeur.

C'est le portrait de sa merveilleuse puissance, dans la description de son Jaguar.

Les maîtres se comprennent.

Agréez, cher Monsieur de Goncourt, l'expression de mes sentiments de respects.

A. Rodin

4. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

[1886[51]]

Cher Maître

J'envoie un petit plâtre, s'il est de votre goût, faites-moi l'honneur de l'accepter, sinon j'en ai d'autres à vous offrir.

Agréez, cher Monsieur de Goncourt, l'expression de ma respectueuse sympathie.

A. Rodin

117 Bd de Vaugirard

50） Voir *Catalogue des bronzes de Barye, épreuves de choix / Épreuves de choix / Groupes, Statuettes, Bas-reliefs, etc. / Modèles / Tableaux et dessins par Barye / Composant la collection de M. Auguste Sichel* / Et dont la vente aura lieu / Hôtel Drouot, salle N° 3 / Le samedi 27 février 1886 / À 2 heures ½ / Par le ministère de Me Paul Chevallier / commissaire-priseur / 10, rue de la Grange-Batelière, 10 / Assisté de M. Charles Mannheim / expert / 7, rue Saint-Georges, 7 / Expositions / particulière / Le jeudi 25 février 1886 / publique / Le vendredi 26 février 1886 / De une heure à cinq heures. L'auteur du présent article consulta le site suivant : Bibliothèque nationale de France / https://gallica.bnf.fr, Edmond écrit la préface du présent catalogue, intitulée « Un mot » (p. 3–7), dans la dernière partie de laquelle l'écrivain décrit « Jaguar dévorant un lièvre » d'Antoine-Louis Barye.

51） Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 237.

5. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

[1886[52]]

Mon cher Maître

Merci de la lettre que vous m'avez envoyé, j'ai de quoi en être très flatté. De toutes les façons, j'ai de quoi aussi faire des jaloux.

Agréez, Monsieur Edmond de Goncourt, l'expression de mes sentiments dévoués et respectueux.

A. Rodin

6. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

[Avril 1887[53]]

Cher Maître

Je pourrai aller exprimer mes félicitations, et vous remercier de votre bienveillante douceur, en m'envoyant 2 billets pour *Mauperin*.

J'ai été heureux de passer la soirée, avec des personnages de votre création, avec votre passion, avec votre esprit.

Agréez, cher Monsieur de Goncourt, l'expression de ma respectueuse sympathie.

Rodin

7. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

[1887[54]]

52) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 238.

53) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 239. La date présumée par l'auteur de cet article. Celle que la Bibliothèque nationale de France présume est l'année 1886.

54) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 240.

Mon cher Maître

Je viens de finir de lire votre *Journal*.

Permettez au sculpteur de faire nombre avec vos admirateurs et de vous dire combien je trouve les vérités, présentées avec un art incomparable, dans ce livre.

Combien il y a des choses […[55]]

8. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

[s.d.[56]]

Mon cher Maître

Je n'ai pu aller hier vous remercier comme c'était mon intention.

Ce plaisir que je me promettais, je suis donc obligé de le remettre à dimanche.

Agréez mes sentiments respectueux et bien dévoués.

Rodin

9. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

[1889[57]]

Mon cher Maître

Germinie est sublime.

Je ne pas [*sic*] pourquoi il y a eu tant de bruit.

Votre respectueusement dévoué et admirateur,

Rodin

55） On ne trouve pas la feuille suivante de la présente lettre.

56） Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 243.

57） Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 246 : carte de visite sur laquelle sont imprimés les mots suivants : « A. Rodin » (au milieu); « Le Samedi » (en bas à droite); « 182, rue de l'Université » (en bas à gauche).

10. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

[1889[58)]]

Cher Maître

Dimanche je profiterai de l'honneur que vous me faites, (en m'envoyant votre carte) de m'inviter, toujours aux doctes et charmantes réunions, du *Grenier*.

Acceptez, avec votre bienveillance ordinaire, mes respectueuses amitiés.

Rodin

11. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

182 rue de l'université 24 oct [obre] 1890[59)]

Mon cher Maître

Vous avez un génie pour mettre la vérité en relief. Je suis fort ému de votre livre. Vous pensez que je suis très flatté que vous m'avez envoyé votre *Journal* et je vous envoie mes repectueuses et reconaissantes amitiés.

Rodin

À un de ces dimanches.

12. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

182 rue de l'Université

19 mars 1891[60)]

58) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 247.

59) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 248.

60) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 249.

Merci mon cher Maître

Je suis heureux d'être du nombre de vos amis que vous honorez de l'envoi de votre livre.
Je vous envoie l'expression de ma reconnaissance et de mon respect.

Rodin

13. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

182 rue de l'Université
23 juin [18] 91[61)]

Mon cher Maître

Quelle chance, je vais lire votre livre délicieusement. Je suis encore engainé dans un lumbago. Mais ma tête est bonne, prête à jouir de la lecture d'*Outamaro*. Ah mon cher Maître bravo. Que cette étude d'art japonais arrive à point pour tout le monde car vous savez faire vivre l'instruction que vous donnez, et cet art n'est plus presenté par des voyageurs, mais par le grand artiste de la langue française.

Merci. Votre respectueusement dévoué,

Rodin

14. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

[1891[62)]]

Mon cher Maître

Je suis grippé, sans cela, je tenais à venir au Grenier, le premier jour, ce soir, pour le second, à

61) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 250.
62) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 251.

dimanche.

Votre respectueusement dévoué,

Rodin

15. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

182 rue de l'Université
5 mars [18] 92[63)]

Mon cher Maître

Merci de votre envoi.

Je suis bien honoré que vous pensiez à moi, et je ne sais comment vous exprimer mes remerciements.

Mirbeau n'est pas encore venu pour que j'achève son portrait mais déjà je pourrais travailler à ma gravure. Enfin dans le courant de l'été, j'aurai rempli mes emgagements.

Votre admirateur dévoué,

Rodin

16. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

Mon cher Maître

Voulez-vous donner le livre de Mirbeau à mon jeune homme pour que, dans mes petites vacances, je fasse la gravure.

Très heureux, cher monsieur de Goncourt, de travailler à ce portrait, que je ferai de mon mieux.

Très respectueusement votre dévoué,

Rodin

63) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 254

30 juillet [18] 92[64)]

17. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

Mon cher Maître

J'ai reçu votre honorée lettre et chez Mirbeau où je dois aller, je ferai le croquis, un dessin, ces jours-ci.

Je vous envoie l'expression de mes respectueuses amitiés en vous priant de me rappeler au bon souvenir de monsieur et madame Daudet, que je félécite de son succès nouveau.

Rodin

6 août [18] 92[65)]

18. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

Mon cher Maître

J'irai vous porter un dimanche et bientôt, ma pauvre plume sèche, si elle vous plaît un peu, je remontrai dans mon estime et je vous en serai reconnaissant.

Votre bien dévoué,

Rodin

18 novembre [18] 92[66)]

19. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

[1894[67)]]

64) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 252.

65) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 253.

66) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 255.

67) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 256-257.

Mon cher Maître

Vous avez une très mauvaise nuit mais je sais aussi que vous étiez beaucoup mieux. Je n'ai pas voulu vous déranger de votre repos précieux, après cette fatigue de la nuit.

Je désirais vous remercier de l'intérêt que vous portiez au sculpteur dès l'année 1886 (*Journal*.) et continuer à vous demander votre appui pour Geffroy (décoration).

Notre ami Hecq, chef du cabinet des Beaux-Arts à l'instruction publique, demande que nous fassions ma deuxième dimanche près du Ministre ; vous cher Maître, Bracquemond, Carrière et moi. La première près de Monsieur Poincaré avait été très prise en considération cependant.

Hecq m'avait parlé de mercredi ou de vendredi, il serait bon que cette semaine où si votre santé ne le permettait que dans quelque délai, vous m'avertissiez pour que nous soyons à vos ordres.

Agréez, cher Maître, l'expression de mes sentiments d'admiration et de cordialité.

Rodin

20. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

7 juin 1894[68)]

Cher Maître,

Vous avez bien voulu me faire l'honneur de m'envoyer votre livre fait en collaboration avec votre frère Jules sur *l'Italie d'hier*.

Je suis bien reconnaissant de l'amitié que vous voulez me marquer. [Très[69)]] Cher grand artiste, agréez ma chaleureuse et respectueuse amitié.

Rodin

21. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

68) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 258.

69) Mot barré.

Juillet [18] 94[70)]

Mon cher Maître

Vous venez de me faire ce grand honneur de m'envoyer le volume de vos mémoires, dans lesquels, je suis si amicalement portraituré.

Votre burin célèbre a dessiné la silhouette du praticien honoré et flatté de vos remarques.

À vous de cœur et d'admiration, Rodin

22. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

29 mai [18] 95[71)]

Cher Maître

Je suis toujours honoré de votre *souvenir*. Vous pensez combien je vous ai d'affectueuse reconnaissance.

Vous êtes la ligne droite. Vous coupez à travers les hommes et leur caractère pour aller au but que vous vous êtes tracé.

Admiration et respect de votre dévoué,

Rodin

23. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

182 rue de l'Université

Mon cher Maître

70) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 259.

71) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 260.

Vous aurez établi la communication entre nous et le Japon. Déjà peintres par les taches, dessinateurs, en ont profité. Espérons que les sculpteurs en prendront le mouvement. Vous avez depuis longtemps découvert intellectuellement le Japon et vous complétez, aujourd'hui par la vie d'un maître, notre éducation.

Il vous appartient en dehors de vos études si humaines, d'aller, encore poussé par vos instincts d'art, chercher au Japon leur art et aussi leur humanité. Votre esprit lumineux suffit à ces tâches par l'amour du travail régulier. Vous êtes notre exemple, cher Maître, en beaucoup de choses, et quant à moi je suis reconnaissant de votre bonté et de votre sympathie.

Merci pour l'envoi du livre.

Votre dévoué et affectionné,

A. Rodin

Février [18] 96[72)]

24. AUGUSTE RODIN À EDMOND DE GONCOURT

Mon cher Maître

Je suis toujours en retard avec vous pour les témoignages d'amitié. Je reçois de vous, très honoré, votre livre le *Journal*, et cette cordialité que vous marquez toujours au sculpteur me touhe profondément, venant en plus d'un Maître tel que vous. Pour qui les hommes de[73)] ma génération a [*sic*] ce respect profond et affectueux et admirateur ?

Agréez, mon cher Maître et ami, l'expression de mon vif dévouement.

Aug [uste] Rodin

27 juin [18] 96[74)]

72) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 261.

73) Les mots « les hommes de » sont ajoutés.

74) Aut. : BnF, n.a.Fr. 22474, f° 262–3.